

それでは、今朝のテキストは**マタイの福音書 7 章 13～14 節**であります。短いですが、ここを軸に他の聖書の箇所も開いていきたいと思えます。『¹³狭い門から入りなさい。滅びに至る門は大きく、その道は広いからです。そして、そこから入って行く者が多いのです。¹⁴いのちに至る門は小さく、その道は狭く、それを見いだす者はまれです。』マタイの福音書の 5 章から 7 章までが有名な『**山上の垂訓**』と呼ばれるものです。又は『**山上の説教**』と呼ばれるものです。ガリラヤ湖の小高い山というよりも丘なんですけど、そこでイエス・キリストが集まった群衆たちに説教をしたわけです。ですから『**山上の垂訓**』だとか『**山上の説教**』と呼ばれるもので、有名なイエス・キリストのメッセージであります。

で、その中で今お読みした **7 章の 13 節 14 節**は、“狭い門”と。これも有名な言葉になって私たちの日々の会話の中にも実は使われるようなものとなっております。まあ“狭き門”と言う言葉はよく耳にしたいと思いますし、皆さんも使うかもしれません。まあ有名な小説の題名にもなっています。『狭き門』フランスのノーベル文学賞をとったアンドレ・ジットという人が『狭き門』という小説を書きました。その題はこのマタイの 7 章 13 節からとられたものであります。1909 年の古い小説ですが、皆さんも読んだことは無いかもしれませんが、読んだ人もいると思えますが、その題名位は聞いたことがあろうかと思えます。ただ現在、日本ではこの“狭き門”と言え、大体競争が激しくて突破することが非常な困難である、難関の大学だとかを指して狭き門と使うことが多いかと思えます。MGF のメンバーにもこの“狭き門”を、日本語で使われるような“狭き門”ということで、毎年のようにチャレンジしている人たちもおります。司法試験等は正に“狭き門”と呼ばれるものですがけれども、皆さんに考えて頂きたいのは、ここで私たちが今は、この“狭き門”は何であるのかをハッキリと教えられ、そして“狭き門”から私たちは今、命に至る道を進んでいるということを覚えて欲しいと思えます。そして多くの方は、この“狭き門”が何であるかも分からず、勿論見出しでもおらず、そしてむしろ逆の滅びに至る“広い門”の方に進もうとしている。その人達に是非、“狭き門”を伝えて欲しいと思えます。今、“狭き門”という言葉が聖書からとられた言葉だと言いましたけれども、ついでに参考までに今開いている**マタイの福音書の 7 章**のところには、例えば **6 節**の方。そこには“豚に真珠”という言葉が見られます。これも日本語で使います。又 7 章の後半の部分 **24 節**から **27 節**のところ。そこでは“砂上の楼閣”という言葉が、そこからとられたというふうに、いろんな説がありますが、言われております。砂の上に楼閣を建てると。また“蒔いた種は刈り取る”なんて言葉もよく使いますが、これも実は聖書からとられた言葉であります。こちらは**ガラテヤ人への手紙の 6 章 7 節**からとられております。“働からず者食うべからず”とか。これも実は聖書からとられた言葉で、**第 2 テサロニケの 3 章 10 節**からの言葉です。知らなかったという人にとってみたら、目からうろこだと思ってしまうかもしれません。その“目からうろこ”という言葉も聖書からとられた言葉です。**使徒の働き 9 章 18 節**から。サウロという人の目からうろこのようなものが落ちたと。ただ聖書からとられた言葉といえ、独り歩きをして、いろいろな日本人的な解釈が加えられて、その出典先の聖書とはかけ離れたような理解をしている場合も多々あるかと思えます。とりわけこの“狭き門”というものはよく誤解されて、理解されております。

先程司法試験の話もしましたがけれども、もしあなたが見に覚えの無い罪で逮捕されて、そして裁判で有罪宣告を受けてしまったとするならば。まあ**冤罪**ということですね。でも、あなた自身は身に覚えがないわけですから、当然自分が潔白である、無実であることを知っております。他人が勝手に推理をして、そして結論を下したとしても、あなたは身に覚えがない以上、無実であることをあなた自身は知っているわ

けです。他人がいくらどのように結論づけようと、無実であることには変わりはありません。それと同じように、人間が神様のことについていくら推理して結論を下したとしても、やはり神様のことは神様にしか分からないわけです。ですから神様は聖書というものを私たちに与えて下さいました。聖書というのは神の言葉。神様ご自身のことを啓示して下さるので、“啓示の書”というふうにも呼びます。それが今開いている聖書というものです。そこには神様ご自身のことが書いてあります。勝手な人間の推測で、勝手な結論を下してはならないものであります。そして特に今日のテキストは、“狭い門”というキーワードをもって、皆さんにそこから神様とはどのようなお方であるのか、皆さんにお分かちしていきたいと思います。

この“狭い門”というのは、イエス・キリストによりますと、“いのちに至る門”であると。言い換えれば“救いへの道”であるというふうに記載されております。「世界には沢山の宗教、沢山の神々がありますがけれども、結局は皆同じ神を信じているんじゃないか。」とか。「何故キリスト教だけが狭き門なのか。唯一の救いに至るただ一つの道であるのか。キリスト教徒というのは実に狭い、排他的である、独善的である。」と。「自分たちだけが正しい。絶対とする傲慢な連中だ。」と。「一神教を信じる者たちは、戦争ばかりやっている。自分たちが正しいと思い込んでいるからだ。」と。「だから私は宗教は嫌いなんだ。とりわけキリスト教は。」とか。よく皆さんもそのように言われることもあるかもしれません。そのもととなっているのが正にこの“狭い門”という言葉であります。江戸時代の後期に農村復興政策を指導した思想家でもある有名な人があります。二宮尊徳または二宮金次郎という人です。皆さんも名前は知っていると思います。大体小学校にこの二宮尊徳の小さな像が飾られていると思います。薪を背負って本を読んで歩く姿が印象的であります。その二宮尊徳が話した例え話があります。それを二宮翁夜話にのみやおうやわというのがあります。二宮尊徳の例え話としてこのようなものが綴られております。『世の中に本当の真理は唯一つしか無いが、その真理に近づく入り口はいくつもある。神道、仏教、あるいは仏教でも天台宗、浄土宗、真言宗などいろいろあるが、これらはいずれもいくつもある真理への入り口についている小道の名前に過ぎない。例えば富士山に登るのに吉田から、須走りから、須山からそれぞれ登れるが、最終的に頂上に至れば同じ所である。これを違う目的に到達できる別々の道があると考えるのは誤りである。入り口がいくつあっても最終的に到達できる場所の一つである。それは真である。ところが世の中ではこれらを別々の道であると言い、真理がいくつもあるように言っている。』有名な話でありますけれども、これは江戸時代末期の人の話です。実際に江戸時代末期、いわゆる幕末になりますと、様々な新興宗教が起こります。幕末三大新宗教というものがありまして、黒住教、また金光教、天理教。これら三つが幕末三大新宗教というもので、皆当初は神道系であったんですが、そこから明治に至ってさらに沢山の宗教が生じてきました。この三大宗教からいろいろなものが生じてきました。結論としては、万教帰一ばんきょうきいつという『万の宗教が一つに帰るんだ』と、または万教同根ばんきょうどうこん『万の宗教は皆同じ根を持っている』先程二宮金次郎の例えでも話したように、「一つの真理しか無いけれども、一つの神しか無いけれども、そこに至る道は、入り口は沢山あるんだ。」と。そういった教えは皆さんにも馴染みかもしれません。“宗教多元論”というふうにも昨今は呼ばれております。『登り行く道は異なれど、同じ高嶺の月を見るかな』という歌を引用して、どの宗教も結局は同じ神に到達するんだと述べたのは、カトリック作家の遠藤周作という人です。遠藤周作は、皆さん知っていると思います。『私のイエス』という本の中に今読んだフレーズが引用されております。この遠藤周作という人はこの宗教多元論を提唱したイギリスの自称プロテスタントのジョン・ヒックという人に影響を受けています。ジョン・ヒックという人がやはり同じように「すべての宗教は皆一つの真理を指している。ただ、それぞれの文化、それぞれの時代に、それぞれの表現があって、ただ呼び名だけが違うんだ。」と。すべてはひとつである。いわゆる万教帰一思想、万教同根である。宗教多元論というものであります。こうしたものに遠藤周作も非常に深い影響を受けまして、著作にもそういったものが反映されております。残念なことではあります。

でもこれらは決して新しい考えではなくて、古代から存在しておりました。東洋思想には非常に馴染みがあります。日本人にはですから非常に身近な感覚というか、これが欧米人にしてみたら真新しいように聞こえるかもしれませんが、日本人には比較的馴染みやすい考え方であろうかと思えます。

で、インドのヒンズー教でも、古代からこのように言われています。クリシュナという神がいて、クリシュナ神は「人が歩む道はどれも私の道である。どこを歩いていても結局は私に至る。」これはヒンズー教の経典の中で、クリシュナ神という神様が述べた言葉とされています。そもそも神に至る道というものを山登り・登山に例えるというのが私はとんでもない過ちだと思っております。登山というアナロジーが、そもそもが間違っていると。少なくともキリスト教は、登山には例えられないというふうに考えます。なぜならばキリスト教の神というものは、人間をはるかに超越した神であるからです。天地万物を、この大宇宙を創造された神と聖書は告げております。**創世記**の頭から、**1章1節**から、『初めに神は天と地を創造された。』と。そこから聖書は始まるんです。また二宮尊徳や、また遠藤周作や、イギリスの神学者のジョン・ヒックであったり、またヒンズー教徒でも、まあ日本人の多くの東洋思想に影響を受けた者たちは、皆それぞれ表現は違うけれども、それは山登りと一緒に、入り口が違うだけで同じ頂上を目指しているんだと考えるわけですが、キリスト教では神様は山頂にいるのではなくて、人間からは超絶している超越した存在ですから、山の上ではなくて天におられるというふうに説くわけです。すなわち人間の探究心や人間の努力や人間の犠牲によっては、その超越した神に近づくことすら出来ないと言っています。そんなちっぽけな神ではないと、聖書は説くわけです。全宇宙を創造された神だと言いました。人間は、まだ宇宙を知りません。日々新しい発見があります。最近もニュースで聞きました。太陽の質量の250倍位の物凄い恒星が発見されたとか。新発見ばかりであります。森羅万象を人間が把握することなど出来ません。でもキリスト教の神はそうした大宇宙を、森羅万象をすべて創造されたと言っています。もしこの山登りの、登山の例えが正しいとするならば、キリスト教以外の神々というのは人間を超越しない、超えることのない存在と見られるわけです。人間の努力や人間の犠牲でたどり着けてしまう存在です。それは単に人間と同等であるのか、同じようなレベルであるのか、人間以下の存在というふうにみなされるわけです。ですからキリスト教の信仰とそれ以外の信仰というのは同じ土俵では比べられないということです。同じ登山の例えにキリスト教は含めることは出来ないということです。むしろキリスト教の信仰は、その超越した神は山の上ではなくて、天におられると。で、その天におられる神が逆に神に近づくことの出来ない人間のもとに下って来て下さったと。他の宗教は人間が神の方に近づこうとする。キリスト教はそれとは正反対・真逆であって、神の方が人間の方に近づいて下さると。決定的に違うわけです。ですから真逆のものを同じたとえ、同じアナロジーで一括りにするというのは全く無理があるということです。他の宗教は、キリスト教以外の宗教は確かに一括りに出来るかもしれませんが。すべては人間が神に近づこうとする。人間のイメージに当てはまる神観・神像というのをもって、それが人が作った宗教というわけであり、または偶像というものであります。ですからキリスト教というのは非常にユニークな宗教と言って良いと思えます。比べることの出来ない、比類無き宗教。イエス・キリストの教えも他の宗教家と同じようなことを教えていると、多くの方は勘違いしております。全く違うということも、今からお話したいと思えます。

しかし、私たちには非難が浴びせられております。キリスト教は偏狭だ。狭い、偏屈だ、排他的だ、独断的だ、傲慢だと言われるわけですが、もう一つ誤解を解いておきたいと思えます。キリスト教が狭いわけではありません。キリスト教が偏狭なのではありません。またはクリスチャンが偏狭なのでもないんです。イエス・キリストが偏狭なんです。私たちクリスチャンが、キリスト教が、狭いんじゃない、イエス・キリストが狭いんです。**ヨハネ 14:6**を今度は開いて欲しいと思えます。開かなくても多くの人には馴染みの言葉だと思えます。イエス・キリストの有名な言葉です。ご自身が何者であるかということ

を宣言されました。『イエスは彼に言われた。(彼というのはトマスという弟子です。非常に疑い深い弟子であります。最後の最後までイエスが復活されたことを信じなかった弟子ですが、そのトマスに対して)「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。』」キリスト教が狭いのではない。クリスチャンが狭いのではない。イエス・キリストご自身が狭いんです。イエス・キリストご自身が「わたしが唯一の道である。唯一の真理である。唯一のいのちである。わたしでなければ、わたしを通してでなければ、だれひとり神に近づくことは出来ない。入り口がいっぱいあるんじゃない。わたしだけが狭い門である。唯一の門である。」とおっしゃってるわけです。ですから、もしノンクリスチャンの人が、あなたがクリスチャンということが分かって、「キリスト教徒というのは非常に狭い考え方をしている。偏狭だ。偏屈だ。排他的だ、独善的だ。」と、もし言ってきたならば、あなたに非難を浴びせてきたならば、「いや私が偏狭なのではありません。イエス・キリストが偏狭なんです。だからイエス・キリストに聞いてみて下さい。」と。そのように答えて欲しいと思います。イエス・キリストがどんなお方か、聖書に書いてあるので、是非聖書を読んでみて下さい。これは神の啓示の書です。

ここでイエスの発言に、宣言に目を留めて欲しいと思います。私は〇〇であると。ヨハネの福音書にはこういう表現が何度かあります。7つ、8つ代表的なものがあります。例えば「わたしはいのちのパンです。」とか。「わたしは世の光です。」とか。これらは皆ギリシャ語では『エゴー・エイミー』という“私はあるものである”という重要な宣言であります。何故それが重要かと言いますと。“私はあるものである”というギリシャ語『エゴー・エイミー』、ヘブル語では『エヒイエ・アシェル・エヒイエ』と言うんですが、その出处というのは旧約聖書の出エジプト記の3章において、モーセが荒野で燃える柴の中から神の声を聞きました。そして、そこでモーセは「あなたの名前は何ですか。」とその神様に対して、その燃える柴の中から語っているのは神様でしたので、「あなたの名前は何ですか。」と聞いたところ、「わたしはあるものである。』『エヒイエ・アシェル・エヒイエ』と答えられて、そのギリシャ語訳が『エゴー・エイミー』というものです。ですから、これは神様の個人名なんです。で、その“私はあるものである”と云うのは『主』または『ヤーウェ』という神様の名前の由来でもあります。ですからここでイエスが『エゴー・エイミー』という宣言をされたというのは、「わたしは旧約聖書に登場する主である。ヤーウェである。モーセに語ったのはわたしだ。」と言っているわけです。それは受肉前のキリストと呼ばれる場面ですが。ですからここで単にイエスは、「自分が道であって、真理であって、いのちです。」と言うにとどまらず、「わたしこそがヤーウェである。わたしこそがイスラエルの神である。わたしこそが“わたしはある”というものであるの正体だ。」というふうに宣言したわけです。ですからこれはイエスがご自身、神であるということを宣言したわけです。

で、厳密には“わたしはあるものである。”という意味は、「わたしは、なるものである。」というのがさらに厳密な意味となります。ですからここでイエスは「わたしはあなたの道となります。わたしはあなたの真理となります。わたしはあなたのいのちとなります。」というふうに宣言されたわけです。聖書の神はあなたの必要となって下さいます。そして、それは唯一であると。唯一の道、唯一の真理、唯一のいのちであります。このような宣言は人間には出来ません。神様にしか出来ない宣言であります。ご自身が道そのものである。『道』というものは、私たちが歩むべきもの。『真理』というものは、私たちが信ずべきもの。『いのち』というものは、私たちが経験すべきものです。それぞれすべてイエスが「わたしがそれになる。」とおっしゃったわけです。それは人間には到底宣言出来ないものです。もし、イエスが神でないならば、イエスはただのイカレポンチです。精神病患者です。自分が神だと自称している、気が狂った狂信者であると。若しくは本当に宣言した通りの神である。そのどちらかです。気が狂っているのか、本気で正にその宣言通りのお方が真実を語っているのか、そのどちらかであります。それを私たちが吟味する必要があ

ります。で、今イエスが語った**ヨハネ 14:6**というのは正に私たちのすべての答えとなっています。人生の答えであります。政治家も、哲学者も、科学者も、宗教家も、占い師も、カウンセラーも、スピリチュアル・カウンセラーも、精神分析医であろうと、答えは出せません。イエスのこの宣言は私たちにとっての人生の答えであります。イエスは「わたしが道を示してあげよう。」とか、「真理を教えてあげよう。」とか、「いのちに導いてあげよう。」とは、おっしゃいませんでした。それならば、他の宗教家でもそれなりのことは語れます。いろいろな宗教の開祖または教祖、彼らも「道を教えてあげましょう。真理を教えてあげましょう。」そのぐらゐのことは口には出来ます。でもイエスは「わたしは道そのものである。真理そのものである。わたし自身がいのちそのものだ。」と宣言したわけです。これはイエスにしか、神にしか、宣言出来ないものであります。仏教の開祖、釈迦も、釈尊も、ゴータマシッダールタも、道へ導く者でありました。イスラム教の開祖、モハメッド、ムハンマドも真理を教える預言者でもありました。宗教家であれば、真理は教えてきたわけです。イスラムの經典の『コーラン』にも確かに真理というものは教えられております。あらゆる宗教の經典というものには、それなりに真理というものは含まれております。いわゆるそれなりの真理というのは、すべての宗教に共通している『黄金律、ゴールデン・ルール』と呼ばれるものでもあります。すべての宗教にはある程度共通した教えというのが見られるわけです。それを『黄金律』または『ゴールデン・ルール』と言います。その『ゴールデン・ルール』というのは、『黄金律』というのは、多くの宗教、道徳や哲学でも見いだされるものですが、このようなものです。「**自分にしてもらいたくないことは、他人にはしてもいけない。**」まあ、よく親として皆さんも子供に口にしたいと思います。「**他人様の迷惑にだけはなってくれるな。**」と。これはすべての世界中の親が言うことです。また、世界中の宗教が説くことです。世界中の哲学も説くことであります。「自分にしてもらいたくないことは、他人にもしてはならない。」という内容の倫理的な言明が、この『黄金律、ゴールデン・ルール』というもので、すべての宗教、すべての哲学、すべての教えの中に含まれております。

例えば、儒教の孔子はこう言いました。「**己の欲せざるところ、他に施すことなかれ。**」と。『論語』中の言葉です。

また、ユダヤ教の有名なラビで、ヒルレルという人はこう言っています。「**あなたにとって好ましくないことを、あなたの隣人に対してするな。**」孔子と同じことを言っています。

またヒンズー教では、「**人が他人からしてもらいたくないと思う如何なることも、他人にしてはならない。**」『マハ・バーラタ』という經典に書いてあります。

で、イスラム教も、これはムハンマド、マホメットの遺言であります。「**自分が人から危害を受けたくなければ、誰にも危害を加えないことである。**」

皆、孔子にしても、またマホメットにしても、またヒンズー教徒にしても、ユダヤ教の高名なラビ、ヒルレルにしても、同じことを言っています。「だから宗教は皆同じだ。」と結論付ける人がいます。「すべて黄金律と呼ばれる共通項があるから、結局は言い回しこそ違えど、全部の宗教は同じじゃないか。皆宗教同じ心理を説いている。」と言うわけですがけれども、確かにそれらの宣言、表現、すべて間違いではありません。他人様に迷惑をかけるなど。道徳的で、倫理的で、良いことであります。でもそれは、不完全なるものであります。いわゆる道そのもの、真理そのもの、いのちそのものではありません。印象としては非常に消極的な印象を受けると思います。そして、それらはやはり限界があります。消極的ということは、積極的でないということです。当たり前ですけれども、積極的には出来ないので、消極的にとどめている。敢えて限界を設けて、人間の出来る範囲にとどめているという言い方も出来るわけです。または、人間の都合に合わせて解釈しているというふうにも、説くことが出来るわけです。決して神に至るような教えではありません。その一方で、テキストの**マタイの福音書 7:13, 14**がテキストですが、その前に**12節**というところがあります。この**7章12節**は、キリスト教の黄金律、キリスト教のゴールデン・ルールと呼ば

れる有名なものです。『それで、何事でも、自分にしてもらいたいことは、ほかの人にもそのようにしなさい。これが律法であり預言者です。』イエスの言葉です。先程ご紹介した様々な宗教の開祖たち、聖人たちの言葉と比較してみてください。よくよく注意しなければ、同じことを言っているなというふうに思ってしまうかもしれませんが、全然違います。他のすべての孔子にしても「己の欲せざるところ、他に施すことなかれ。」否定しております。消極的です。又はユダヤ教のヒルレルという人「あなたにとって好ましくないことを、あなたの隣人に対してするな。」否定的です。消極的です。ヒンズー教も「人が他人からしてもらいたくないと思う如何なることも、他人にしてはならない。」ムハンマドもそうです。「自分が人から危害を受けたくなければ、誰にも危害を加えないことである。」これら皆否定形であり、また消極的であります。その一方でイエスの教えは似ているようで非なるものです。「何事でも自分にしてもらいこと」です。「してもらいたくないこと」じゃなくて、「してもらいたいことは他の人にもそのようにしなさい。」全く違います。積極的です。「これが律法であり預言者です。」この表現というのは、これが聖書です、と言っているわけです。旧約聖書のことを“律法と預言者”というふうに表現しているんですが、ここには一切消極性がありません。肯定的であり、積極的であり、限界がありません。その前のそれぞれの宗教の開祖たちのゴールデン・ルールというのは、すべて否定形であり、すべて消極的であり、すべて限定的であって、限界があって、そしてそれは人間が何とか守れる範囲でとどめられております。イエスの教えは限界がありません。これは人間を超越した神の領域を語っているわけです。自分にしてもらいたいことを他人にもあなたはできますか。多分出来ないと思います。自力では到底無理だと思います。イエスの語っておられることは、人間中心ではなくて、人間の出来る範囲、理解できる範囲で話しているのではなくて、これは神の言葉として話しているわけです。人間中心でなくて、神中心でものを語っているわけです。ですから、私たちはそのような人間の力を超えた、限界を超えた、人間を超越した存在を見上げるわけです。自分以上の存在だからこそ、限界がないお方だからこそ、私たちは信頼が出来るわけです。自分と同じ程度の神であるならば、あまり頼りになりません。あなたは自分のことも頼りにしないと思います。自分と同じ程度の神だったら、多分がっかりさせられると思います。失望すると思います。でも、自分を超えた存在であるならば、自分の力を遥かに超えた、超越した存在であるならば、私たちは期待できます。「私には出来ないけれども、この方には出来る。この方に全幅の信頼を置いて、絶対に失望することはない。裏切られないんだ。」と。「自分ではどうしても出来ない問題ですら、この神によって解決していただけるんだ。」と。例えば“死”という問題。“死”はすべての人にもたらされます。避けることは出来ません。どうしても出来ません。でも、神には“死”ですらどうにでも出来るわけです。日本人というものは、宗教的には多神教の土壌で育つてますので、いわゆる“宗教多元論”が非常に身近なものとなっておりますので、ある意味で「どんなものでも受け入れますよ。」と。シルクロードの最終地点でありますから、ずっと中東の方からいろいろな文化や宗教が入ってきたわけです。その終着点日本でした。ですから、いろいろなものが最後は日本で止まったわけです。そこから向こうは太平洋ですから、日本止まりでシルクロードのすべての文化や宗教といったもの、日本が終着点でありました。何でも受け入れるという体制。それは長い古きに渡って培われてきたものです。宗教的に言えば、何でも受け入れるわけですから、当然のことながら多神教となっていきます。当然のことながら“宗教多元論”というものが私たちにとっては自然なものとなってきます。で、私たち日本人は、「どんな宗教でも受け入れますよ。」ということで、非常に寛容だと自負しています。日本には宗教人口が二億人以上いると言われております。もちろん二億人も日本にはいません。ということは、一人の人が複数の宗教を持っている、信仰しているということです。「私は仏教徒だけれども、神道でもあります。檀家だけれども氏子でもあります。」とか、いろいろな宗教を一人の人が複数持つわけです。それは、「私たち日本人は寛容だから。」と、ある人たちは鼻にかけていうかもしれません。その一方で、「キリスト教は自分たちだけが正しいとする、他は受け入れない、非常に排他的で、

そして偏屈だ。」と。「私たちはどんな宗教でも受け入れます。むしろ私たちは寛容だ。」と言うかもしれませんが、それは聞こえが良いんですけれども、悪く言えばルーズだということです。宗教的には非常にルーズな人たち、それが国際社会で評価されている日本人の姿であります。民主主義の原則というのが、神々の世界でも有効であるかのように思い込んでしまっています。「どの神様も平等に扱おうじゃないか。」そして、その神々の中から自分の考えや敬虔や感性や好みにあったものを自分の神とする。目的は、この神様から当然何か目に見える物的な経済的なご利益を得ることです。神々も人間の様々な要求に応えなければなりませんから、大変なわけです。皮肉って言ってます。いろいろな名前を勝手に付けられたり、石や木や又は金属や紙きれがそれぞれの神だと言って、そうしたものに閉じ込められてしまうわけです。そして、無い袖を振らされるわけです。同じ言葉を何度も聞かされて、そして人間に奉仕しなければいけない存在。可哀想な神々です。

実はキリスト教がそうしたものとは全く異なる。いわゆるキリスト教は他のものとはぜんぜん違う。宗教とも呼ばれないという所以がそこにあります。人間が作ったものが宗教とするならば、キリスト教は人間が作ったものではないからです。キリスト教は人間中心な教えはありません。むしろ、神中心のもので、不完全な人間が作る宗教は当然不完全なものになってしまいます。でも、もしこれが、神に起源を持つ教えであるならば、それは完全なものであるわけです。で、他にも宗教的にルーズな日本人が、いろいろな宗教を持ちたがるその根拠は、ご利益をそうした神々から、そうした宗教から引き出したいからだと言いました。具体的な例もここでお伝えしておきたいと思えます。例えば、幕末の三大新宗教の一つの天理教は、“陽気ぐらし”というものがあります。皆さんも聞いたことがあるかもしれません。又は金光教の、これも三大新宗教の一つですが、長命と出世、それをかれらは“おかげ”といいます。“おかげさま”とか言いますね。又は PL 教団は、“人生は芸術”ということを主張します。創価学会は“幸福製造機”とされるご本尊というものがあります。また霊友会や立正佼成会は、行者祈祷による病の癒やし。そして世界救世教は、民が神がかりによる病気・貧困・争いのない地上天国をもたらします。そういう約束をするわけです。また生長の家と言ったら、“万教帰一”というものです。まあ、こういったものがすべて新興宗教に共通しています。全部現世利益というものです。でも、そういったものを宗教はうまく利用して、そこから暴利を貪ろうとします。人々の心のすきにつけ込んで、「病気が治りますよ。経済が潤いますよ。そして世界は平和になりますよ。家庭も円満です。交通安全です。無病息災です。」というようなことを説いて、ちゃっかりとお金を取るわけです。問題は信仰というものが人間の欲望を満足させる手段となってしまうことです。そうしたいわゆる利益というものを私は全否定するつもりはありません。病気が癒やされること、経済が潤うこと、家庭が円満になること。全部素晴らしいことです。私たちが求めるべきことです。でも、もしそうしたものが人間の欲望を満足させる手段となってしまうならば、人間にとって都合のよいものを、そういったものごとを、状況を運んでくれるものを、神として拝むとするならば、それは大きな問題と言えます。突き詰めてそのことを捉えていきますと、自分より他に神はいないということになってしまうわけです。自分の欲望のために宗教の名を借りて、また神々を作り上げて、そして自分の欲求に応える、仕える神を持つということは、正に自分が神になるということでもあります。

その一方で、キリスト教も確かに家内安全、交通安全、無病息災、健康だとか繁栄といったものも勿論教えますし、勿論求めるようにも説きますし、でもそれらがすべてではないということも併せて強調するわけです。むしろ、たとえ病気であっても、たとえすべてが失われたとしても、それでも積極的にその痛みの中にあって、苦しみの中にあって、その貧しさの中にあって、その悲惨な状況の中にあって、平安を見出したり、希望を見出したり、そしてそこに意味というものを見出していくわけです。ですから、他の宗教はただ表面的な現世利益ばかりです。それしか頭にありません。キリスト教ももちろん現世利益全部を否定しません。でも、それ以上のものを求めることが私たちには出来るように与えられています。その

中で私たちは神に出会うことができます。その中でそうした苦しみにも、素晴らしい意味がある。逆に言えば、病気が癒やされて健康になるよりも、病気のままでいる方が遥かに幸せだということも体験出来るわけです。人間の価値ではなく、人間中心の考えではないということです。健康な人でもいくらでも不幸な人はいます。お金持ちでも簡単に命を絶って自殺する者もおります。キリスト教においてはご利益というものを人間の幸福の基準とはしないという教えがあります。むしろ、辛いことがあっても、苦しいことがあっても、それは神様が私たちに許されたことであって、神は私たちのお父さんであって、私たちはその子供でありますから、父が子供を愛して、鍛えて、訓練して、成長させて下さる。そのために通るべき過程である、プロセスであるというふうにしても与えて下さいます。そして神様が絶対的な主権者であって、私たちが好もうと好まざろうと、私たちの現世利益に繋がろうと繋がるまいと、神様の計画がベストであって、最善であって、そのお方がなさること、それを私たちはただ従順に受け入れる姿勢をもって、「あなただけがすべてをご存知です。あなたは私たちの最善を知っておられます。あなたの最善を抜きにして自分のベストを求めません。」と。そのようなちっぽけな生き方は、クリスチャンはしないわけです。

で、宗教の開祖と呼ばれる人たち、孔子、(孔子は宗教じゃないですね。儒教。) 又は仏教ですね。これも宗教とは言えないかもしれません。お釈迦さん。又イスラム教の開祖、マホメット、ムハンマド。こうした人たちはすべからく道も説きます。真理も説きます。又いのちも説きます。でも、説くだけです。教えるだけです。彼らもそれぞれが、お釈迦さんにしても、孔子にしても、マホメットにしても、ソクラテスにしても、それぞれが一人の人間として道を探求したわけです。真理を探求したわけです。いのちとは何か。彼らも又求道者であったということです。

それに対してイエス・キリストは全く彼らとは違って「**わたしが唯一の道そのものである。わたしが真理そのものである。わたしがいのちそのものである。**」と。「**わたしを通してでなければ、誰一人父のみもとに来ることはありません。**」と。これは他のいわゆる宗教家、宗教の開祖とは全く違う立場であります。彼らは皆それなりに高尚な高潔な人生を送ったかもしれませんが、彼らは皆死にました。お釈迦さんも死にました。弟子たちはそのお釈迦さんの骨を大事にして、今はそれがいわゆる仏舎利塔というものに納められています。世界中の仏舎利塔から釈迦の骨を集めれば何十トンというものになってしまうということです。でも、ハッキリしていることは、彼らは皆死んだということです。イエス・キリストも勿論死にました。でも、彼は三日目に甦ったんです。イエスというお方は、キリスト教の開祖ではありません。キリスト教の神そのものであります。イエスは人となられた神。受肉された神と呼ばれるお方です。天地万物を造られた超越した神に私たち人間は当然近づくことは出来ません。それをたとえるならば、それを強いてアナロジーにして言い換えるならば、登山ではないということはハッキリとしています。地球の地表から太陽に到達しようとする自力で努力する、その姿に重ね合わせることが出来ます。天地万物を造られた神に近づこうというのは、ただ山を登って頂上を目指す、そんなレベルではありません。そうではなくて、まあそれも完全なるアナロジーとは言えないかもしれませんが、地球の地表からあなたが自力でジャンプしてでも、太陽に近づこうとするようなものであります。聖書の神に近づこうというのは、正にそういうものであります。通常であれば、太陽に行く前に宇宙に出なければいけません、当然ジャンプしてもそこへは行けません。たとえスペースシャトルの力を借りても、たとえ宇宙服を着たとしても、太陽には到達できません。近づけば当然一瞬にして死んでしまいます。聖書によれば、神は光だと言っています。光なる神には暗いところがありません。聖なるお方だということです。また義なる神だということです。その聖にして義なる神に不完全な、暗いところがある、欠けだらけの罪人の私たちがどうして近づけるでしょうか。土台無理なんです。でも、他の宗教は山登りをして、登山をして神に近づこうと言います。そうした神はあまりにもスケールが小さいわけです。人間が努力すれば結局は到達できてしまう神ということです。地球の地表から太陽に自力でジャンプして近づこうなどとバカげたことは誰もしないと思いますが、

私たちが信じる神はそれ以上にスケールの大きいお方。この宇宙をもってしても納めることの出来ない神であります。「じゃあ私たちは、結局は真^{まこと}の神に出会うことは出来ないのか。どんなに頑張ったって、1メートルくらいしかジャンプ出来ない。」と。でも、そんな私たちをこの神は憐れんで下さいました。私たちには出来ませんが、神には何でも出来ます。神の側で私たちのことを深く憐れみ、そして一方的な恵みをもって近づいて来て下さいました。私たちの信じる神はただスケールがバカでかいだけじゃなくて、その愛もバカでかいんです。人智を遥かに超えた愛をもって、私たちにこの偉大な神が近づいて来て下さったんです。宇宙を造った神が、塵にすぎない私たちのことを気にかけて近づいて来て下さったわけです。

信じられないような話です。でも、世界中でそのことを毎年祝っています。それがクリスマスという出来事です。神は光です。聖にして義なる神ですが、同時に神は愛です、というふうにも言われています。人間を救うためには、むしろ神が近づいて、神が人間の姿をとって、私たちのもとに来て下さったと。これも簡単な分かりやすいたとえをしたいと思います。雑草が生い茂ってきたので、そろそろ除草剤でも使って根絶やしにしようと思った時に、自分の庭でもいいです。考えてみて下さい。想像して下さい。そこに草をよくよく見るとハダニがいっぱいいました。このまま除草剤を撒くと当然のことながらハダニは全部死滅します。でも、ハダニを愛して止まないあなたは、躊躇します。除草剤を撒けば確かに全部雑草は根絶やしに出来る。でも、この可愛いハダニたちには絶滅するのは心苦しい。それは私には出来ない。ハダニを愛するあなたは、何とかして雑草も除去しなければいけない、根絶やしにしなければいけない。でも、ハダニと一緒に絶滅させることは出来ない、ジレンマを感じます。一生懸命あなたはハダニに語り掛けます。「今から除草剤を撒くから、急いで逃げなさい。」と。「安全な地に逃げなさい。」と、あなたはこればかりに、本当に最大のボリュームで大きな声で叫び、喚^{わめ}くんですが、ハダニは一向に聞こえてないようです。分かってないようにマイペースで生きています。そこであなたは、これは自分がハダニにならない限りは、ハダニのレベルで、自分があまりにも大きすぎるので、ハダニには私のことが見えていないんだと。ハダニに分かってもらうためには、この警告をしっかりと伝えるためには、最早^{もはや}人間としてはどうにも出来ない。自分がハダニにさえなれば、この可愛いハダニたちに迫っている危機を伝えることが出来るのにと。勿論そんなことは出来ません。

まあちょっとハダニはあまりにも快く思わないかもしれません。まあせいぜい蟻くらいにしましょうかね。これから草刈機で草を刈ろうとしているそこに可愛い蟻たちが歩いていて、蟻たちに危機が迫っている。それに対してあなたは何とかして教えたい。今滅びゆく蟻たちに対して忠告をしたい、警告をしたいという時に、当然蟻にならなければ、蟻の言葉で話さなければ、コミュニケーション出来ないわけです。彼らを救うためには、自分が彼らと同じものにならなければならない。それが正に私たちの神がしてくださったことです。

この大宇宙を通して、この素晴らしい自然を通して、神の造られた被造物を通して、既に私たちは神がおられることを知っております。知っているのに私たちは神に目を向けようとしません。神の言葉に耳を傾けようとしません。だから神は私たちを滅びから救うために自ら天から下って来て下さいました。私たちと同じ姿をとって、私たちに分かる言葉を語って下さったわけです。それが正にイエス・キリストが私たちのために成して下さったことであります。永遠の滅びから、地獄から私たちを救うために、私たちの罪を身代わりに負って下さって、十字架に掛かって死んで下さって、そして三日目に甦られました。イエスは死ぬためにクリスマスでお生まれになりました。まあ、死ぬためというのは、勿論私たちを救うためということです。「心が狭い。偏狭だ。」と私たちはクリスチャンとしてその信仰がゆえに非難されることもあるかもしれませんが、もしあなたがこのように人から言われるならば、むしろそれを誇りとして欲しいと思います。喜びとして欲しいと思います。そのような“狭い神”は、“狭い門”は他にはありません。あなたのために命を捨てるほどに愛して下さる神は、他にはいません。天地万物、宇宙を造られた唯

一まことの神が、私たちと同じ人間の姿をとって、そして私たちの出来ないことをすべて代わりにして下さった。こんな素晴らしい神は他にはいません。それが、“狭い”と言われれば、私はむしろ喜びたいと思います。「その通りです。狭いです。」と。本当にこんな神は他にはいない。だから誇りに出来るんです。似たような神は他にもいますよ、じゃないんです。ですから、ここで是非“狭い”とか“排他的”だとか、又は“独善的”だと言われても、^{ひる}怯んではいけません。そもそも真理というものは一つしかないものがあります。その性質上狭いのは当然です。いくつも真理があったら、どれかが嘘っぱちだということです。たとえば電話で誰かに連絡しようとするれば、正確な電話番号をかけることは自明のことです。大体近い番号が、なんて言っても絶対にかかるはずがありません。当然それは間違い電話になります。ですけれども、もしそれが“狭い”と言うならば、「近い番号で電話しているのにかからないなんて、電話会社が心が狭いんだ。」と、そんなのは全くナンセンスな話です。それと同じナンセンスなことをノンクリスチャンのあなたのお友達たちはあなたに言うわけです。「キリスト教は狭い。」と。それは実にナンセンスな話です。繋がる番号は一つしかないんです。神に繋がる道はたった一本しかないんです。真理は一つです。いのちも一つであります。

で、この“偏狭”は、“狭い”という考えは、二者択一を迫ります。二つに一つという択一です。“狭い門”か、“広い門”か。イエス・キリストか、永遠の滅びか。天国か、地獄か。という二者択一です。そこが狭いわけです。で、私はその狭さが非常に有難く思っています。どうして有り難いかというと、もし沢山複数の選択肢があるならば、私のようなものはもうアップアップです。一つ一つどれが本物か探りながら、相当な時間がかかってしまいます。でも、二者択一ならば二つに一つですからそれほど迷うことはありません。いわゆる無駄な時間、無駄な人生を過ごす必要はないということです。むしろ神様が分かり易くして下さい、二つに一つにして下さった。これは有り難いと感じるわけです。どの宗教も同じだと主張する人に限って、非常にいい加減であります。何故いい加減かと言うと、キリスト教についてろくに知らうともしません。又他の宗教についても深く真摯な姿勢で真面目に学ぼうとはしません。もし、それぞれの宗教を真剣に学ぶならば、それぞれは全く違うことを教えている、全く違う土台を持っている、全く違う価値観を持っていると。これは「どれも同じだ。」と、絶対にそんな乱暴なことは言えないんだという結論に至るはずであります。でも、自分が寛容だという人たちは、「どの宗教も皆一緒ですよ。同じことを教えてるんです。」と、それは実にいい加減な結論であります。学んでもいないのに、知りもしないのに、平気でそういうことを言うわけです。本当に学べば、それぞれが全く^{あいいい}相容れない、水と油のようなものだということに気付くと思います。その人に是非チャレンジして欲しいと思います。「どの宗教も一緒だ。じゃあ、オウム真理教も一緒ですか。」と。チャレンジしてみてください。「統一教会も一緒ですか。法の華三法行も一緒ですか。紀元会も一緒ですか。」と、是非問うてみてください。まあ、このことも是非皆さんにお配りしている週報にも書いてある内容（※ 同 HP に掲載してあります。）ですので、いわゆる多神教、宗教多元論には矛盾だらけ。全くそれらは愚かな考えであるということが書いてあります。

最後に皆さんにお伝えしたいのは、キリスト教というのは時間のない人、つまり死にかけている人にはグッドニュースです。二者択一で迷わなくてもいいです。二つに一つ、どっちかでいいんです。時間のない人、特に死にかけている人をキリスト教は救うことが出来ます。キリスト教の救いはシンプルだからです。イエス・キリストを自分の救い主として、主として、神として信じればあなたは救われるんです。教会に通わなくても、聖書 66 巻を最初から最後まで読破しなくても、献金をしなくても、奉仕をしなくても、いろいろな修行や苦行を積まなくても、あなたはイエス・キリストをただ自分の救い主として信じるだけで、その瞬間、病床であろうと、路上であろうと、どこであろうと、あなたはその時に救われるんです。その救いというのは、永遠の滅びからの救いです。ですから、時間のない人でも迷うことはありません。死にかけている人でも、意識が薄らいでいる人でも、その場で決心することが出来ます。ですから、山登

りする必要はありません。私たちには登山する力も、登山する時間も、ないと思います。神が私たちのために、あなたのために、天から降りてくれました。救いの手を伸ばして、そして私たちを蟻地獄から救って下さったわけです。この“狭き門”は決して難関ではありません。ですから、私は自分の信仰がゆえに「偏狭だ。偏屈だ。狭い。排他的だ。傲慢だ。」と言われても、むしろそれを光栄に思います。「その通りです。あなたの言う通りです。私の信じる神は狭いです。」と。「それを誇りに思ってます。」と。「イエス・キリストのようなユニークな神は、救い主は、他にはいません。」と。「信じるに値するお方です。人生を賭けても余りあるお方です。」と。「こんなに素晴らしい神は他にはいません。」そのように私は誇らしげに話すことができます。

もし、あなたが今日死ぬとしたら、あなたは何処に行くか、分かっているでしょうか。今日、帰りに交通事故で死ぬかもしれません。又この熱さの中で熱中症で倒れるかもしれません。心臓発作だとか、脳梗塞だとか、いつ何があるか分かりません。年齢順とは限りません。でも、もし今日あなたが死ぬとしたら、あなたは死後、何処に行くか、分かっているでしょうか。もし、分からないとするならば、是非この瞬間、あなたにも二者択一をして欲しいと思います。このメッセージを CD で聴く人たちや、インターネットで聴く人たちも、是非聞いているその場で、「もし今死んだら自分は何処に行くか分からない。不安です。恐ろしいです。天国に行けるかどうか分かりません。その確信も確証もないんです。」という人がいるならば、是非この場で二者択一をして欲しいと思います。ローマ 10 : 9 は、皆さんお馴染みだと思います。もう皆さんもこの聖句を経験していると思いますが、そこを読んで終わりたいと思います。『⁹なぜなら、もしあなたの口でイエスを主と告白し、あなたの心で神はイエスを死者の中からよみがえらせてくださったと信じるなら、あなたは救われるからです。¹⁰人は心に信じて義と認められ、口で告白して救われるのです。¹¹聖書はこう言っています。「彼に（イエス・キリストに）信頼する者は、失望させられることがない。』」イエス・キリストに信頼する者は失望させられることはないんです。信じるに値する方です。永遠の運命を預けて、十分安心して、保障を受けて、平安を頂ける、そんな救い主であります。あなたは天国に自分で行くんだという確信はあるでしょうか。自分が今永遠のいのちを持っているという確信はあるでしょうか。もし、ないならば、クリスチャンのふりをしないで下さい。もし、ないならば、今すぐこの場でも、この聖句に基づいてイエスを主と告白して、そして勿論心で「イエスは死者の中からよみがえったんだ。イエスは私の人生の主です。救い主です。」と、信じて欲しいと思います。そうするならば、必ずあなたは救われて、あなたは絶対に失望させられることはありません。これまであなたは失望の人生だったかもしれません。いろいろなものに頼りを置いて、いろいろなものに信頼を置いて、いろいろなものに相談をして、それは人であろうと、物であろうと、お金であろうと、環境だろうと。その度にあなたは裏切られてきたかもしれません。その度にあなたはがっかりして、失望して、絶望していたかもしれません。「あの人を信頼していたのに。あの牧師を。あの教会を。あの会社を。あの株を。」いろいろなものを当てにしていたかもしれません。でも、イエス・キリストはあなたを絶対に裏切りません。失望させることは絶対に、この方に信仰を置かなければ、失望させられることは絶対にありません。是非信じて下さい。既に救われたクリスチャンたちもなお一層信じて下さい。地獄から救って下さったあなたを、当然借金地獄からも当然救って下さいます。大したことありません。借金地獄なんて。自殺なんかしないで下さい。イエス・キリストがあなたと共におられます。イエスはあなたのために十字架に掛かって死んで下さった神です。では、ここで祈りして終わりたいと思います。